

1) Grade of Development

About four fifth of the girls has secondary breasts and others remain primary ones.

2) Form of Areola

Most of the girls has *Areola plana*, followed by funnel-shaped, semi-spherical Areola. A few of girls has table-topped Areola.

The diameter of Areola is 29-31 mm. The shape is almost ellipsoid.

3) Form of Mamma

Most of them has semi-spherical, dish-like,

and bell-like mamma, and only a few has *mamma ascendens* and funnel-shaped one.

4) Form of Nipple

One fifth of them has the nipples which do not achieve the maturity yet.

In the full-developed nipples the diameters at basis range between 9 and 11 mm. The shape is ellipsoid.

5) Existence of Accessory Breasts.

No distinguished accessory breasts were found among them.

子宮頸部に発生した滑平筋肉腫の一剖検例

昭和32年2月22日 受付

信州大学医学部病理学教室 (石井善一郎教授, 那須毅教授)

薄 井 眞 中 村 雅 男

子宮腫瘍としてしばしば遭遇するものは癌腫及筋腫で、肉腫の発生はこれらに比し遙かに稀である。その中でも頸部に発生する肉腫は更に稀有なものであつて子宮体部肉腫の0.1%に相当するに過ぎない。子宮肉腫の多くは筋肉腫であることは幾多の報告例によつて知るところであるが、ひるがえつて肉腫が筋腫を母体として発生したものか或は全く無関係であるかの点を明らかにすることは個々の場合仲々困難な問題である。

我々は偶々、子宮滑平筋肉腫の再発によつて死亡した51才家婦を剖検する機会を得たのでこれを報告すると共に組織学的検索を基として以上の点についても考察を加えたいと思う。

臨床的事項

患者: 51才家婦。

家族歴: 特記すべきものはない。

既往歴: 48才の時赤痢に罹患した外には著患を知らない。初潮15才、既往妊娠8回、分娩4回、他は2ヶ月で自然流産した。終経は51才の1月であつた。

現病歴: 約1~2年来月経が少しく早くなると共に白色帯下が増量した、昭和29年2月右下腹部に鶏卵大の硬い腫瘍をふれたが異常自覚症はなかつた。信大産婦人科を訪れ子宮筋腫の診断をうけ、この頃から性器

出血を認め2月下旬入院した。

入院時所見: 肥満型で心・肺に異常なく右下腹部に超鶏卵大のやゝ硬い圧痛のある腫瘍をふれるが移動性はない。内診所見として、子宮頸部は花采状鶏卵大に腫大し周囲の陰壁は全周に亘り硬く浸潤され、子宮は児頭大凹凸不平でやゝ硬靱である鏡診上出血性で一部に凝血の附着した腫瘍を認めた。

手術: 3月1日子宮悪性腫瘍の臨床診断のもとに腹式子宮全摘出兼両側副属器剔除術が行われた。

副属器に異常はなく、子宮頸部は凹凸不平に著明に腫大してダルマ型をなしている。

摘出物は重量 630g で子宮体部は硬度剖面共に正常である。頸部は著明に腫大して児頭大となり該部に超鶏卵大乃至鳩卵大の一見筋腫結節様の腫瘍結節がある。硬度はやゝ軟で剖面では髓様淡紅色、中心部は髓様に軟化している。夫々の腫瘍結節は明瞭に境界されているが一部は破壊されている。

術後経過: 4月8日軽快退院したが6月下旬性器出血があり再入院した。腹部に再び腫瘍をふれレ線治療を行つたが、腫瘍は次第に増大し殆ど小骨盤を充たすに至り7月27日死亡した。全経過は約6ヶ月、術後5ヶ月であつた。

病理的事項

剖検所見：腹腔に出血性浸潤した腹水約750ccあり大網は腫瘍転移により一塊をなして上方に挙上し白色結節状を呈している。腸管漿膜面・腸間膜乃至腹壁漿膜面に播種状大小不同の粟粒大から拇指頭大、所により鳩卵大にも達する腫瘍結節が多数に認められ、白色球状、表面滑沢で軟かく孤立又は融合している。手術痕痕部ではこれらの腫瘍は皮下脂肪織及筋層内にも浸潤し特に右側に著明で、この附近から骨盤腔内に向つて児頭大の腫瘍を形成している。

この腫瘍は剖面では桜桃大から鳩卵大類内形のやゝ厚い被膜によつて明瞭に境界された腫瘍結節の融合から成り白色均質髓様である。腫瘍中心部に境界明瞭な凝血塊を容れた鳩卵大の嚢腫が数ヶ見られる。

腸間膜リンパ節の腫脹は少ないが、廻盲部附近に著明な腫瘍形成が認められる。

肝表面に扁平半球状の大豆大から桜桃大の転移腫瘍結節を見るが実質内には転移はない。

縦隔洞及頸部リンパ節腫脹は殆ど見られないが横隔膜が厚く胸腔内面に数ヶ大豆大に突隆している。横隔膜腹腔側では全く正常部位を見出し得ない位一面に腫瘍浸潤があり胸腔には血性滲出液を容れている。

腫瘍の組織学的所見：摘出子宮の腫瘍組織に就いて検索して見ると組織は極めて細胞に富み間質に乏しい。細胞形は主として紡錘形を呈し、更に円形、類円形細胞を見るが、これらの細胞が夫々比較的純粋に存在する部分は概して少なく大部分は混在している。又多形性を示す場所もあり巨態細胞の発現は全体としては極めて少ない。転移腫瘍では全般的に類円形細胞が多く見られる。

細胞核の形は類円型又は楕円形で核分裂像が高度であり速やかな増殖がうかがわれる。

以上の所見から腫瘍は滑平筋肉腫であることは明らかであるが、こゝに極めて興味深く観察される点は腫瘍組織の諸所に肉腫変性を認めない筋腫結節があつて、これらの筋腫結節内に肉腫の増殖が見られることである。

考 按

子宮肉腫の発生は癌腫及び筋腫に比し極めて稀であることは表Ⅰ及Ⅱの如く諸家の統計を見ても明らかであり平均値は共に約3%である。更に頸部に発生するものについては表Ⅲの如く体部のものに比し遙かに稀有なことが分る。

Willis は子宮肉腫の多くは筋肉腫であつて先在する筋腫より発生するものが多いことを指摘しその推断の基礎として普通の筋腫と思われる腫瘍の極く一部に肉腫の発見されること、肉腫の大部分の例では子宮は筋

表Ⅰ 子宮癌腫に対する肉腫の頻度

報 告 者	子宮肉腫	子宮癌腫	比 率
Frankl	38	1036	3.7%
Newton Evans	22	873	2.6%
Berta London	19	1369	1.4%
v. Franqu ⁴	16	304	5.3%
東大産婦人科	15	1113	1.3%
Barner	13	190	6.7%
Marnetta Vogt	7	319	2.2%
Pischzek	5	101	5.0%

表Ⅱ 子宮筋腫に対する肉腫の頻度

報 告 者	子宮肉腫	子宮筋腫	比 率
Steinhardt	38	1873	2.0%
Frankl	38	1363	2.7%
Gal	22	655	3.4%
Barner	15	462	3.2%
Geist	12	250	4.8%
Winter	11	253	4.3%
Imhänser	11	208	5.3%
Reepu, Charlton	11	290	3.8%
Basso	6	105	5.7%
Miller	5	318	1.5%
総 括	169	5782	3.0%

表Ⅲ 体部肉腫と頸部肉腫との関係

報告者	発生部位	体部肉腫	頸部肉腫
Gal		26	0
Steinhardt		20	5
Krukenberg		18	1
Marnetta Vogt		14	1
v. Franqu ⁴		13	1
Poschmam		11	5
Gessner		8	1

腫様を呈すること等を挙げ、Anderson も之を認めているが Ewing は肉腫は多く原發性であるとしている。

筋腫を構成する筋細胞又は結合織細胞から肉腫の発生することは充分考えられることであるが、肉腫と筋腫が夫々独立的に同一子宮の異つた場所に存在することもあり得る訳であつて、かゝる肉腫が筋腫内に浸潤し或は遂に筋腫の全部を破壊し去つた場合等を考えると、水野のいう如く如何なる程度に肉腫が筋腫を基礎に発生するかについて結論することは不可能である。

筋腫を母地として発生した肉腫についての報告は

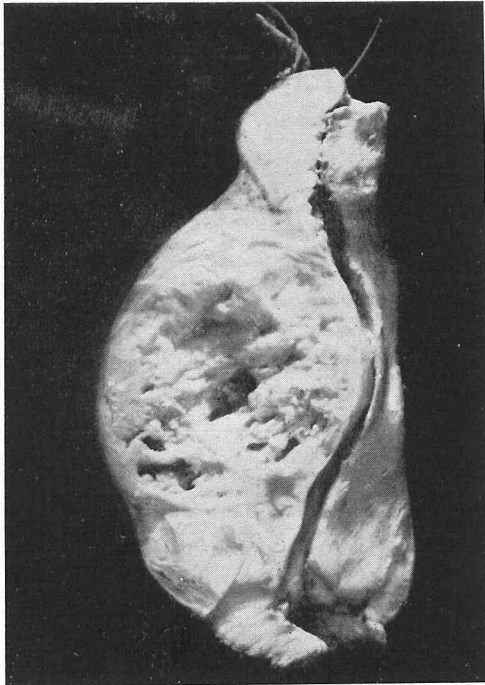


写真 1. 剔出子宮剖面：膨大部は頸部で腫瘍によつて占められる

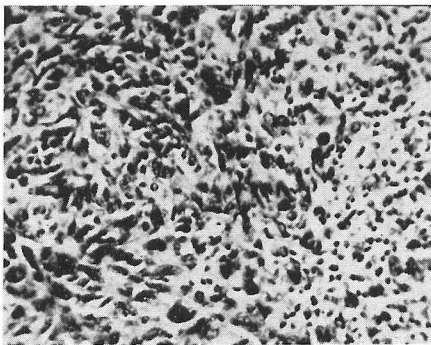


写真 2. 腫瘍組織：細胞の多形性を示す

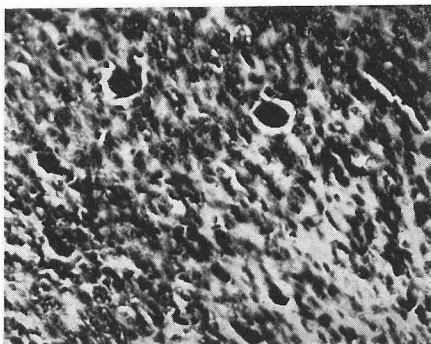


写真 3. 腫瘍組織：巨態細胞を示す

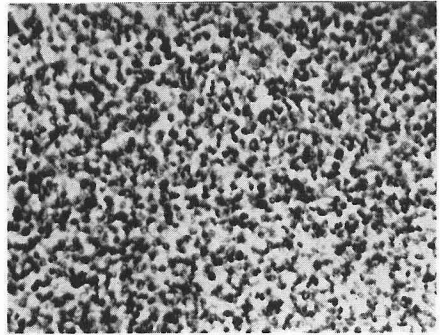


写真 4. 腫瘍組織：円形細胞

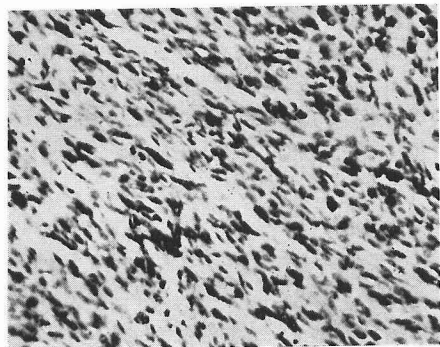


写真 5. 腫瘍組織：主として紡錘形細胞を見る

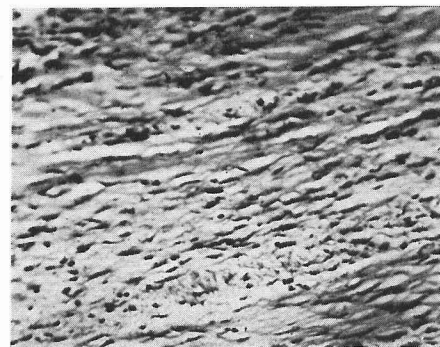


写真 6. 腫瘍組織：肉腫周辺の筋腫様組織

Franklの17例, Steinhardtの20例, Galの13例等があるがこれらを總括すると, 5112の筋腫に対し58例即ち1%に過ぎない。

組織学的に肉腫は円形細胞肉腫, 紡錘形細胞肉腫, 巨態細胞肉腫, 多形細胞肉腫, 筋細胞肉腫に分類されるが, 腫瘍の部分により細胞性状の異なるのが普通であつて数種細胞の混在する混合細胞性腫瘍であることが多い。即ち円形又は紡錘形細胞のみで肉腫の構成されることは稀であると言ふ。円形細胞型は原発性子宮肉腫として現われることは稀であるが, 筋腫中にしばしば見られ, 紡錘形細胞型は子宮に於ては非常に稀であるという。多形細胞型は Robert Meyerによれば子宮肉腫中最も多いとしているがこの型は Rhabdomyosarcom に現われることが多い。成熟細胞よりなるものは Leiomyoma malignum と呼ばれ正常の滑平筋線維又は結合細胞と区別し難い。充分成熟した肉腫細胞は筋細胞とはなはだしく類似する為両者の鑑別は時として不可能になる。本例では前述の組織所見の如く紡錘形細胞を主としているが, 更に類円形細胞等を混じている。単に滑平筋腫様構造を示す部分が存在し且つこの腫瘍結節内に肉腫の増殖が見られる点は興味深く, 肉腫は子宮頸部に先在した筋腫を母地として二次的に発生成育し來つたものと考えらる。

子宮肉腫転移の場所については, Veit, Frankl, Franz 等の材料を總括した水野の表によると肺に最も多く次で肝, 後腹膜リンパ節, 卵巣, 胸膜, 腸の順であり腹膜では肺の約0.1%になつていて血行性の転移が大部を占めリンパ行性のものはかなり少ない。而して一般肉腫と比較する時, 子宮肉腫に於ては血行性転移が特に目立つ。

総括

本例は子宮悪性腫瘍の術后再発によつて死亡した51才家婦の剖検例である。

剔出子宮に於ては腫瘍は頸部に限局し, 頸部は児頭大腫瘤を形成しているが, 付属器に異常はなかつた。剖検時, 腫瘍は骨盤腔を充たし横隔膜・腹膜・腸管漿膜面・肝に転移が著明であつた。

組織学的に腫瘍は混合細胞性の滑平筋肉腫であり, 滑平筋腫様構造部に肉腫の増殖像を認める部分が諸所に存在している。

子宮肉腫は膈及筋腫に比し遙かに稀なものであつて, これらに対する頻度は共に約3%であり頸部に發生するものについては体部肉腫に対し約0.1%に相当するのみである。

肉腫の發生が先在の筋腫に重大な関係のあることは勿論であるが, いかなる程度に関係があるかを結論す

ることは出来ない。

本例では組織所見より, 先在した頸部筋腫より二次的に肉腫の發生を見たものと考えられ, 頸部肉腫である点と共に興味あるものとして報告する。

本論文の要旨は昭和30年10月第7回長野県医学会に於て発表した。

終始御指導を賜つた恩師那須教授に深謝する。

主要文献

- ①水野重光: 日婦誌, 28, 7, 昭28. ②Willis: Pathology of Tumors, 1953. ③Anderson: Pathology, 1953, ④宮地徹: 臨床組織病理学, 1956. ⑤大西虎雄: 日婦誌, 35, 10, 昭15.

An Autopsy Case of Leiomyosarcom originated in the Cervix uteri

Shin Usui and Masao Nakamura

Department of Pathology, Faculty of Medicine,
Shinshu University

(Director: Prof. Z. Ishii and Prof. T. Nasu)

An autopsy case of leiomyosarcoma, which arose from the cervical region of the uterus, was reported. A 51 year old woman had several grayish white and well-encapsulated tumor nodules of hen-egg or pigeon-egg size in the cervical myometrium of the hysterectomized uterus.

These tumors were implanted on the whole peritoneal surface. Histologic findings disclosed a leiomyosarcoma, parts of which showed well-differentiated and other parts poorly-differentiated pleomorphic-cell sarcoma, and suggested the transition from the pre-existing myoma. The statistical analyses of such tumors were made.